

メソアメリカ南東部太平洋側の石彫上面にある 凹みについての一考察

伊 藤 伸 幸

1. はじめに

メソアメリカにおいて、祭壇と石碑が一緒に出土するのは、先古典期中期からである。

石碑は、歴史的若しくは神話的な情景や文字が彫られている。祭壇についてみると、浮彫りが施されるものから、殆ど自然石のままであるものまである。石碑に関連する場合には祭壇と考えられるが、単独で出土した場合には祭壇とできるかどうかは難しい。以上を考慮すると、石彫を単独でみた場合に祭壇と確認できる要素は何かということを確認する必要がある。

ところで、メソアメリカでは上面に凹み部分を持つ石彫がある。例えば、メソアメリカ南東部太平洋側、エル・サルバドル共和国東部のケレパ遺跡では、祭壇と報告される石彫3基が出土している（写真2.1, 2）。この遺跡ではこの他に祭壇と考えられる石彫は出土していないが、この3基総てが上面に凹みを持っている。出土状況から年代は決定できず、様式から先古典期中期末若しくは先古典期後期とされる。しかし、その用途は不明と報告されている。

一方、マヤ低地でも、アルタル・デ・サクリフィシオス遺跡では、香炉－祭壇と呼ばれる石彫3基が出土している（写真5.1）。この石彫の上面の凹み部分には熱を受けたような跡があり、このために香炉－祭壇とされる（Graham, 1972 ; Smith, 1972）。

こうした上面に凹みがある石彫は香炉若しくは祭壇なのであろうか、それとも他の用途が考えられるのであろうか。また、凹み自体は浅いものと深いものがあり、凹みの形状によって用途などに違いがあるのであろうか。この小稿では、マヤ文明の成立に重要な役割を担ったと考えられるメソアメリカ南東部太平洋側において、石彫の上面にある凹みの役割を出土状況などから考察する。また、この種の石彫を検討することにより、祭壇とは何かということを検討する。

2. 上面に凹みを持つ石彫

メソアメリカ南東部太平洋側において、上面に凹みがある大きな石彫若しくは記念物は香炉、祭壇、鉢として報告されている。17遺跡37基の出土事例が報告されている（図1、表1）。以下では遺跡ごとにその事例を説明する。また、この小稿では、ラ・ラグニタ遺跡で出土している石棺は用途が明確なために扱わないこととする（Ichon, 1977）。

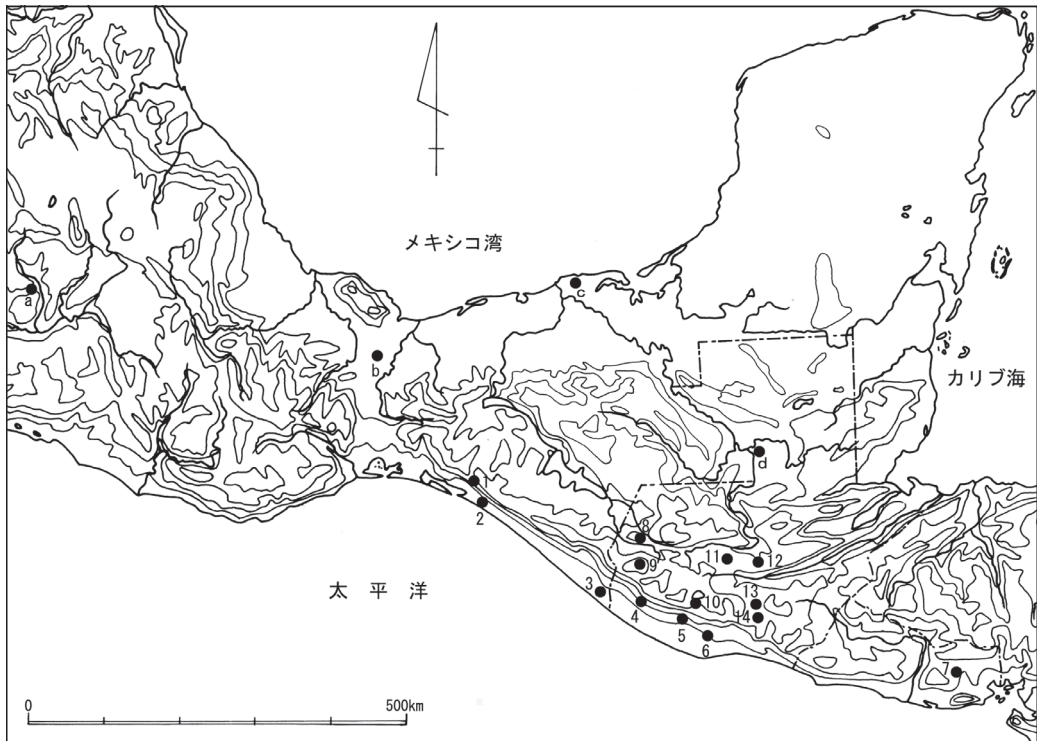


図1 凹みを持つ石彫が出土した遺跡と関連する遺跡

1. イグレスΙΑ・ビエハ、2. ラス・アニマス、3. イサパ、4. タカリク・アパフ、5. コツマルワパ遺跡群（エル・パウル、ビルパオ、エル・カステイヨ、パンタレオン）、6. コヨル、7. ケレパ、8. サクレウ、9. タフムルコ、10. パチワック、11. ロス・セリトス・チホフ、12. エル・ポルトン、13. カミナルフユ、14. アマティトラン、a. テオパンティクアニトラン、b. サン・ロレンソ、c. ラ・ベント、d. アルタル・デ・ロス・サクリフィシオス

(1) イグレスΙΑ・ビエハ遺跡

シエラ・マドレ山脈の麓、標高600mに位置している。A～E建造物群に分かれている。時期は、フェルドンは先古典期後期とするが、金子は炭素14年代測定から古典期前期の可能性があるとしている（Kaneko, 2006；金子、2007）。石彫は石碑10基、祭壇4基、記念物13基が出土している（Ferdon, 1953）。

1号記念物：A-1建造物の階段正面に位置している。下になるほど細くなる円柱状の石の上面に円形の凹みを持っている。切り石で造られた壁（198×290×30cm）に囲まれていた（図2）。

2号記念物：B群より伸びる尾根部分から出土した。大きさは不明である。平らで楕円形の石の上面に約30cm 径のくぼみがある。更に、そのなかには三叉文が彫られている（Ferdon, pl. 21.f）。

表1 メソアメリカ南東部太平洋側出土の上面に凹みを持つ石彫

遺跡		石彫	時期	高さ(cm)	幅(cm)	奥行(cm)
イグレシア・ビエハ		1号記念物	不明	64	57	—
		2号記念物	不明	—	—	—
ラス・アニマス		カヌー形石彫	不明	—	—	—
イサパ		17号記念物	古典期後期?	20	50	40
		24号記念物	先古典期後期～	70	152	120
		32号記念物	先古典期後期～	35	55	55
		37号記念物	先古典期後期～	60	30	—
		55号記念物	不明	—	—	—
		56号記念物	先古典期後期	65	95	93
		13号祭壇	先古典期後期	25	145	120
		63号祭壇	先古典期後期?	72	108	70
タカリク・アバフ		2号祭壇	不明	51	96	159
		36/38号祭壇	古典期後期?	—	—	—
コツマルワバ遺跡群	エル・カステイヨ	8号記念物	不明	52	37	44
	エル・パウル	29号記念物	不明	32	58	58
	ビルバオ	25号記念物	古典期後期?	45	—	—
		26号記念物	古典期後期?	123	58	75
		28号記念物	古典期中期?	110	48	48
		43号記念物	古典期中期?	12.5	80	80
		72号記念物	古典期中期?	50	90	90
		73号記念物	古典期中期?	33	56	56
		76号記念物	古典期中期?	51	53	53
	パンタレオン	11号記念物	不明	44	43	58
コヨル		—	不明	—	135	—
ケレパ		1号祭壇	先古典期中・後期?	85	297	314
		2号祭壇	不明	46	70	84
		3号祭壇	不明	51	140	190
サクレウ		円盤状石彫	古典期中期	12	53	53
タフムルコ		1号石彫	後古典期	120	213	152
		G石彫	後古典期	38	114	68
パチワック		—	不明	—	183	—
ロス・セリトス・チホフ		祭壇	後古典期前期	28.5	60	60
エル・ポルトン		3号記念物	先古典期後期	32	124	172
		4号記念物	先古典期後期	18	116	145
カミナルフユ		5号祭壇	不明	52	105	133
		骸骨形香炉	古典期	—	—	—
アマティトラン		—	不明	59	98	86

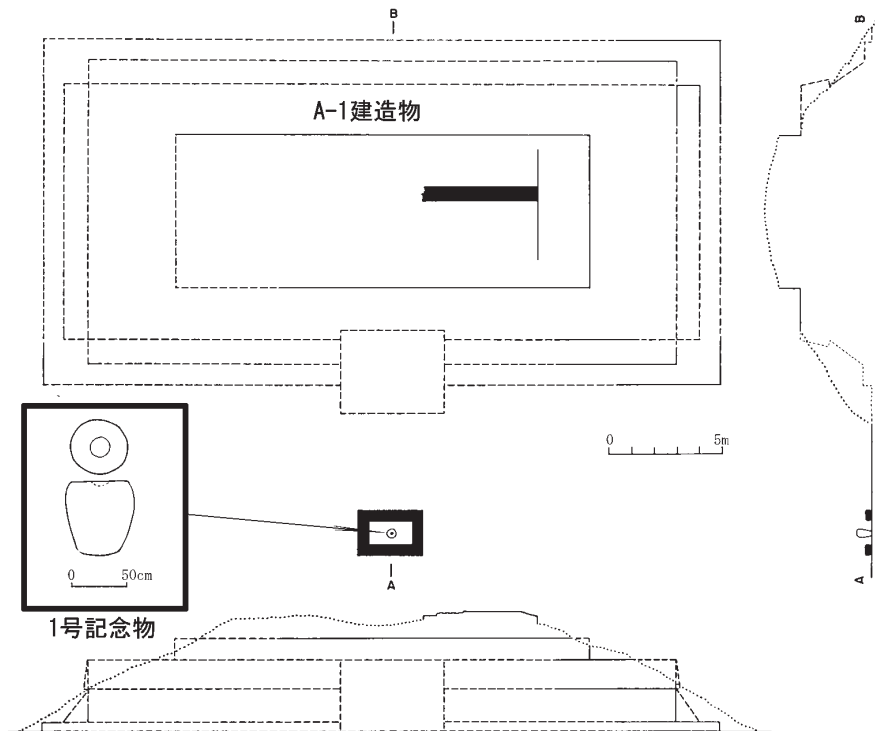


図2 A-1 建造物と 1 号記念物 (Ferdon, 1953, fig. 1 を改変)

(2) ラス・アニマス遺跡

海岸沿いの水路に位置する小島に遺跡がある。建造物20基以上、石彫10基以上が報告されている (Vasallo, 2007)。

カヌー形石彫：楕円形の平たい石の上面に隅丸方形に凹みがみられる。出土状況不明。

(3) イサバ遺跡

シエラ・マドレ山脈から太平洋に向かって緩やかに下ったところにあり、標高約250m に位置している。また、150基以上の建造物が整然と並んでいる。A～G 建造物群に分かれる。石碑89基、祭壇90基、玉座3基、記念物71基が出土している。多くは建造物や広場に関連して出土しているが、イサパ川等の河川に沿った場所からも出土している。先古典期前期から後古典期前期までの考古資料が確認されている (Lowe, et al., 1982 ; Norman, 1976)。

17号記念物：球戯場 (126, 127号建造物) の西側の中央にある2号玉座の前から、三つに割れて出土した。球戯場は古典期後期に機能し、石彫は後古典期前期に球戯場の端に配置されたとされる。上面に浅い凹みを持つ円盤状の凝灰岩質の石彫。上に20cm 径の玄武岩質の球形石 (18号記念物) が西端に乗っていた (図3)。球形石は球戯と関係があるとされる。また、球

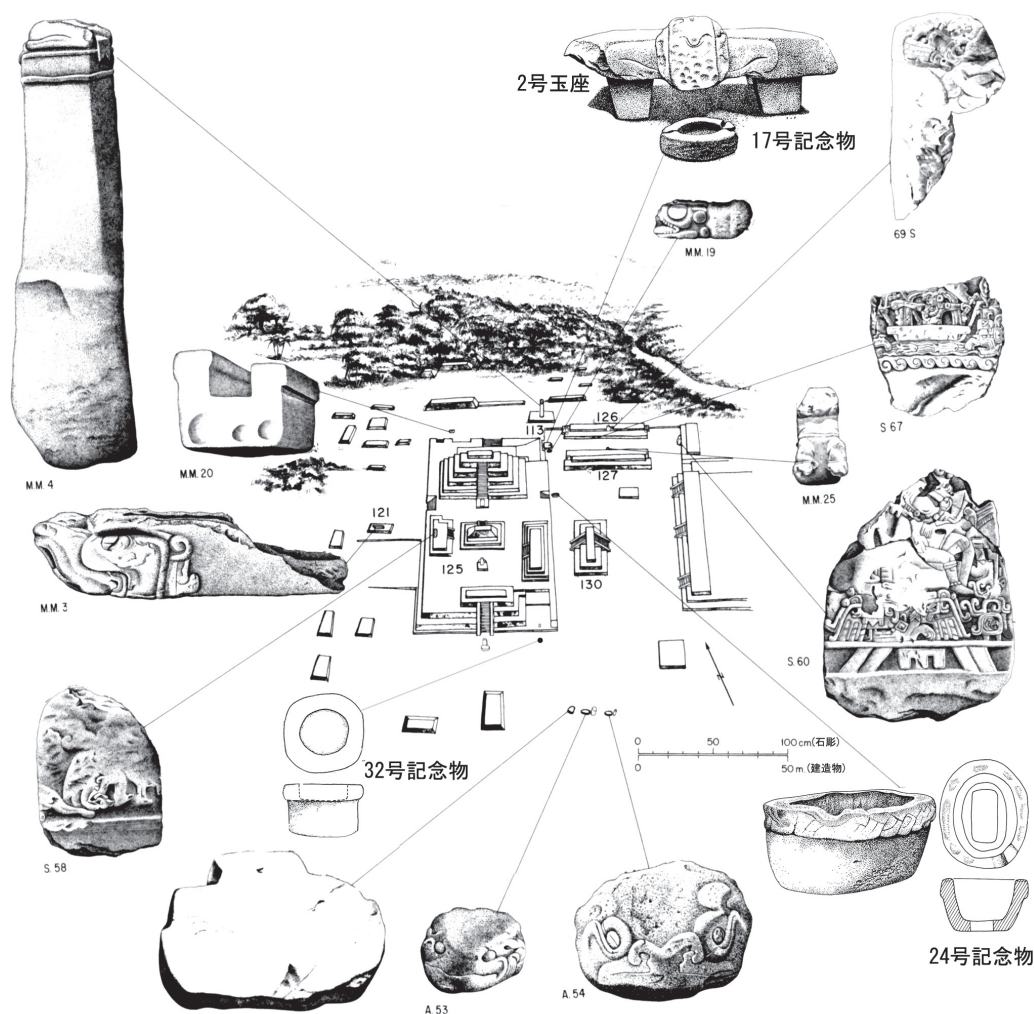


図3 イサパ遺跡 F 建造物群出土石彫と 17, 24, 32号記念物
(Lowe, et al., 1982, fig. 14.1 ; Norman, 1976, fig. 5.49, 58 を改変)

戯場の反対側にあるドーナツ状の凝灰岩質の石彫（33号記念物）と球形石（35号記念物）とは対になるとされる。

24号記念物：F 建造物群 125号建造物の階段部分近くより出土した。125号建造物は先古典期後期から後古典期前期にかけて建造された。鉢状の石彫。壊された状態で出土したが完全な形に復元できた。口唇の一つの端には溝が彫られている。底部には方形の穴（40×70cm）が穿たれていた（図3、写真1.3）。溝の存在と樋若しくはU字形石製品が出土していることなどから、導水に関する石彫とされる。

32号記念物：62号記念物の近く、125号建造物南側にある斜道で出土した凝灰岩質の石彫であ

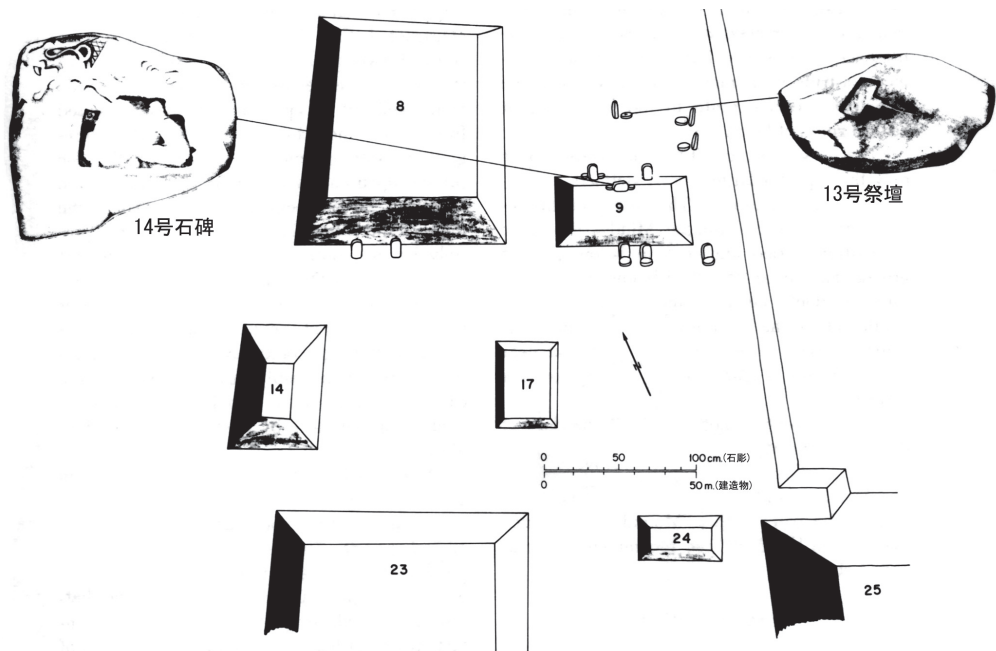


図4 イサパ遺跡C建造物群出土石彫と13号祭壇 (Lowe, et al., 1982, fig. 10.1を改変)

る。円盤状の上部に円柱状の基部が下にある。上面の凹みは後に付け加えられたとされる (図3)。

37号記念物：125建造物東壁近くにある集石部分から出土した。上面に凹みがある円筒形であるが、破片であった。

55号記念物：G建造物群62号建造物から東にある遺跡寄りの川辺より出土した。56号記念物と同様に上面中央に円形で広く削りぬかれた部分があり、その両端には外側に出ていく溝が切られていた (Lowe, et al., 1982, fig. 14.11)。

56号記念物：G建造物群62号建造物より150m 離れ、川面より4m 高い所よりみつかった。出土位置は泉の下の川辺とされる。ギジェン期 (紀元前300～150年：先古典期後期) とされる。縁に6条の溝が彫り込まれた楕円形で、上面の凹みは55(幅)×18(深)cm である (Norman, 1976, fig. 5.79)。縁の溝は水を流すためとされ、2条の溝は水が入る側、4条の溝は水を出す側とされる (Lowe, et al., 1982)。

13号祭壇：C群9号建造物の北、8号建造物東で、やや離れた地点で、素面の83号石碑と関連して出土した。ギジェン期の可能性を示している。しかし、ギジェン期末かハト期 (紀元前50～紀元後100年：先古典期後期) 若しくはイスタパ期 (紀元後100～250年：先古典期後期) に再配置された可能性も指摘している。楕円形で、上面にT字状に溝が彫られていた (図4)。

63号祭壇：G群東の舌状に張り出した部分で73号石碑に関連して出土した。他にも多数の石

碑と祭壇が列をなして出土している。ギジェン期に属する可能性がある。やや不定形の円柱状の石で、上面に楕円形の凹みを持っている (Lowe, et al., 1982, fig. 6.9)。

(4) タカリク・アバフ遺跡

標高約600mの北から南へ傾斜する太平洋岸斜面に位置し、北建造物群、西建造物群、中央建造物群に分けられる。石碑68基、祭壇32基、記念物139基が報告されている (Orrego, 1990; Schieber de L. y Orrego C., 2001, 2010)。

2号祭壇：爬虫類を形象した、鉢状の石彫である (写真1.1)。時期は、石彫の様式から後オルメカ期とされる。出土状況不明 (Parsons, 1986)。

36/38号祭壇：7号建造物の南端で、破片3点が出土した。古典期後期の水路の一部となっていた。破片1点の凹み底部には炭化物が付着していた。この水路には他の石彫の破片も使われていた (Schieber de L. y Orrego C., 2010)。

(5) コツマルワパ遺跡群

コツマルワパ遺跡群は太平洋岸に位置し、標高は約400mである。エル・カスティヨ、エル・バウル、ビルバオ遺跡他から成っている。100基以上の石彫が出土している (Thompson, 1948; Parsons, 1967, 1969)。

1) エル・カスティヨ遺跡

8号記念物：マウンド近くより出土した。角柱状に整形されており、側面に階段状に装飾された部分を持つ渦巻文が浮彫りされていた。凹み部分は、19(径)×17(深)cmである (Parsons, 1969, pl. 53.d)。

2) エル・バウル遺跡

上に数基の建造物が乗っている大きな基壇が中心となっている。

29号記念物：鉢状の石彫。凹みの深さは15.5cmである。出土状況不明 (Parsons, 1969, pl. 53.b)。

3) ビルバオ遺跡

テラス状になっている部分に数基の建造物が乗っている。先古典期中期から後古典期までの考古資料が知られている。この遺跡では鉢状の石彫 (写真4.3) が多く出土している。72, 73, 76号記念物は鉢状である。また、26号記念物も鉢状の石彫であるが、他よりも大きく、形象部分がある (Parsons, 1967, 1969)。

25号記念物：半地下式広場近くの記念物広場より出土し、サンタ・ルシア期 (紀元後700～900年) ? とされる。側面に人物の胸像が浮彫りされた鉢状である。パンタレオン遺跡11号記念物 (写真3.2) と同じ形をしている (Parsons, 1969, pl. 46.f)。

26号記念物：記念物広場より出土し、サンタ・ルシア期 ? とされる。鉢状で、骸骨の小人を抱

えるサルが浮彫りされている。凹みの深さは8 cmである (Parsons, 1969, pl. 46.g)。

28号記念物：円柱状の側面に前で手を交差させている人物が浮彫りされている。その上面に41(径)×6(深)の凹みがある。顔の特徴からラグネタ期(紀元後400～700年)?とされる(写真3.1)。出土状況不明。

43号記念物：記念物広場より出土し、ラグネタ期とされる。円盤状で縁がやや高くなっている。中央より、炭化物が出土し、焼けた部分もあった (Parsons, 1969, pl. 40.c)。

72号記念物：記念物広場より出土し、ラグネタ期とされる。鉢状で、外側の側面に浮彫りが施されている (Parsons, 1969, pl. 47.d, e)。

73号記念物：記念物広場より出土し、ラグネタ期とされる。鉢状で、外側の側面に浮彫りが施されている。凹みの深さは19cmである (Parsons, 1969, pl. 47.f, g)。

76号記念物：鉢状の石彫。凹みの深さは5 cmである。記念物広場より出土し、サンタ・ルシア期とされる (Parsons, 1969, pl. 47.c)。

4) バンタレオン遺跡

11号記念物：ビルバオ25号記念物と同じ特徴を持つ (写真3.2)。出土状況不明 (Parsons, 1967, 1969)。

(6) コヨル遺跡

グアテマラ高地から太平洋にかけての緩やかな斜面に位置する。標高は約300mである。石彫1基が報告されている。ジャガーが側面に彫られた飼い葉桶形の石彫である (Parsons, 1969, pl. 53.d)。

(7) ケレバ遺跡

サン・ミゲル火山の麓にあるサン・ミゲル盆地に位置し、標高は160～180mである。東西に分かれる建造物群からなる遺跡である。約40基の建造物が報告されている。先古典期中期末から古典期後期までの考古資料が知られている (Andrews, 1976)。ケレバ遺跡では、2基は建造物が建てられるテラスの端から出土している。もう1基は建造物の頂部から出土している。

1号祭壇：29号建造物の北北西250m、テラスの端より出土した。ジャガーの浮彫りが施されている。様式からウアパラ期(紀元前500・400～紀元後150年)とし、カミナルフ遺跡のプロピデンシア期に相当するとされる。凹みは140×160×39(深)cmで、横に狭い溝が切られている。水を流すためとされる (写真2.1)。

2号祭壇：9号建造物の頂部若しくはそれに近いところにあったが、正確な出土位置は不明である。楕円形で、上面に方形に凹み部分がある (写真2.2)。

3号祭壇：36号建造物より少し離れた地点でみつかった。36号建造物が乗っている低いテラスの端近くにあったとされる。1号祭壇に似た浮彫りがあったとされる。破片である。

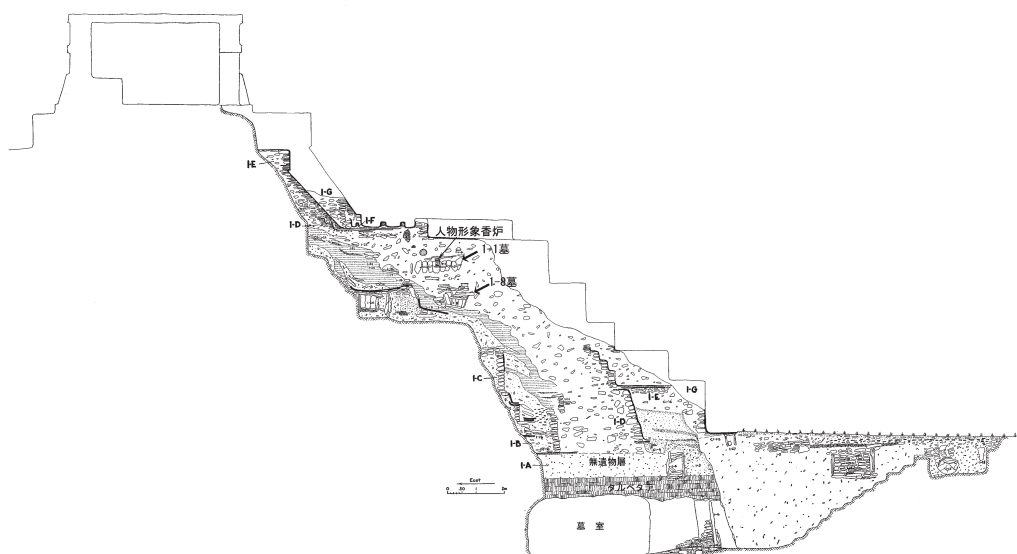


図5 サクレウ遺跡1号建造物断面図 (Woodbury and Aubrey, 1953, fig. 3を改変)

(8) サクレウ遺跡

クチュマタン山地のウエウエテナンゴ盆地の北西に位置する。北西にセレグア川が流れている舌状台地に位置している。標高は約1900mである。古典期中期から征服期まで続く城塞都市である (Woodbury, 1953)。

円盤状石彫：1号建造物内部、1-8墓の上より出土 (図5)。香炉とされ、上面に浅い凹みがある。アツァン期 (古典期中期) とされる。また、カンクヤク期 (後古典期前期) に属する5段目部分にある漆喰仕上げの円形容器部の大きさに相当しているとされる (Woodbury, 1953, fig. 278.j)。

(9) タフムルコ遺跡

タフムルコ火山の麓にあり、標高約2000mである。数基の建造物があり、21基の埋葬が発掘されている。石彫は20基以上がみつかった。後古典期とされる (Dutton & Hobbs, 1943; Tejada, 1947)。

1号石彫：中央広場より出土した。側面には壁龕が浅く彫られ、その周りには物語的な情景が浮彫りされている。上面の凹みは $86 \times 107 \times 43$ (深)cmである (図6、写真4.1)。

G石彫：破片で、方形の板状の石の全面に数人の人物などが浮彫りされる。その上面に彫られた十字形の溝は、外に出るようになっている (図6)。

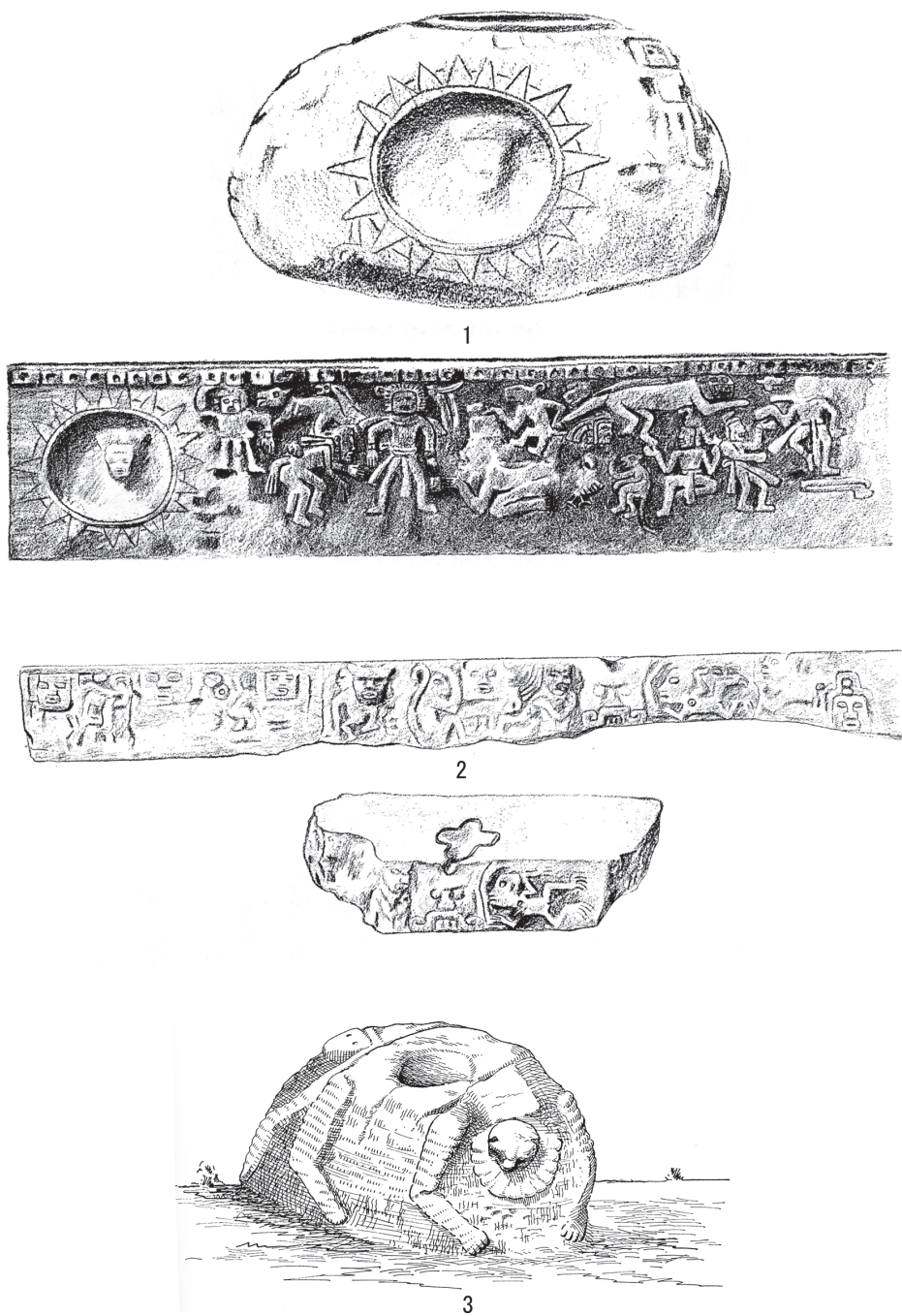


図6 タフムルコ、パチワック各遺跡出土石彫 (Tejeda, 1947 ; Lothrop, 1933, fig. 41 を改変)

1. タフムルコ遺跡1号石彫、2. 同遺跡G石彫、3. パチワック遺跡出土石彫

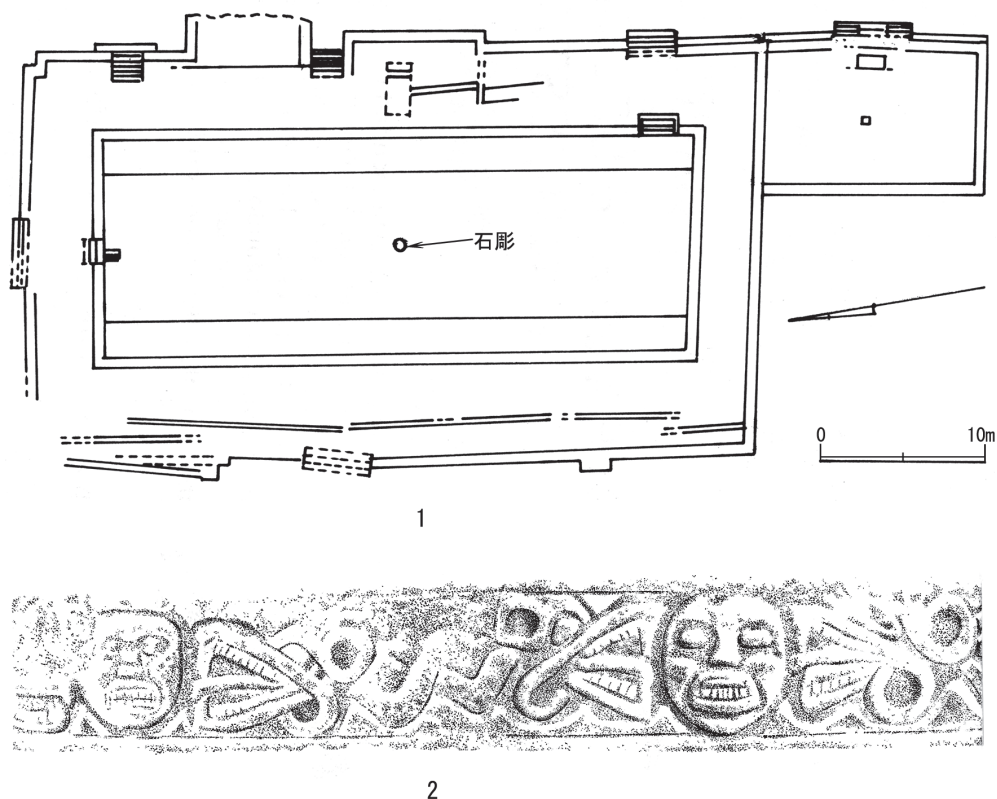


図7 ロス・セリトス・チホフ遺跡球戯場と出土石彫展開図 (Ichon, 1992, fig. 48, 54を改変)

1. 出土位置図、2. 出土石彫展開図

(10) パチワック遺跡

アティトラン湖岸近くにあり、標高は約1600mである。石と土のマウンドが2基ある。北側のマウンドから北西に数メートル離れたところに、幾つかの巨石があり、そのうちの一つに浮彫りが施されていた(図6)。大きな丸い石で全体に4足獣が浮彫りされ、その背中に凹みがある。凹みは7.6~10.2(深)cmである(Lothrop, 1933)。

(11) ロス・セリトス・チホフ遺跡

グアテマラ高地のチショイ川近くにあり、標高は1200~1300mである。緩やかな斜面に位置するロス・セリトス地区とこの地区を見下ろすように丘の上にあるチホフ地区からなる。数十基の建造物があり、祭壇はロス・セリトスA地区の12基の建造物が集まっている地区から出土した。古典期前期から後古典期前期までの考古資料がみついている。主な建造物は古典期後期に建てられた(Ichon, 1992)。

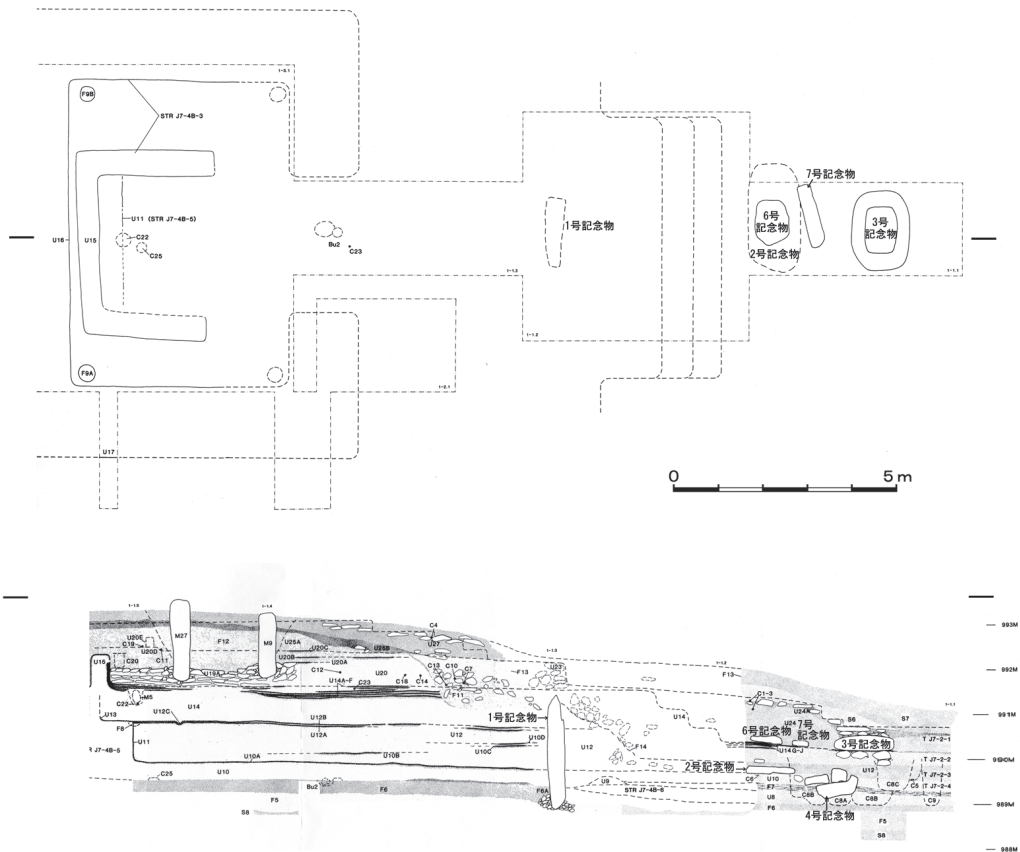


図8 エル・ポルトン遺跡 J7-4B-5, 3 建造物と 3 号記念物 (Sharer & Sedat, 1987, fig. 3.8, 10 を改変)

祭壇：球戯場の中央から出土したが、球戯場が廃棄された後の後古典期前期に置かれたとされる。円柱状で、凹みが上面中央にある。側面には骸骨と蛇が浮彫りされている（図7）。

(12) エル・ポルトン遺跡

グアテマラ北高地のサラマ盆地に位置し、標高は約990mである。時期は先古典期前期から先古典期後期までである。16基の建造物が、テラス状になった部分に建てられている (Sharer & Sedat, 1987)。3号記念物は文字が刻まれた1号記念物（石碑）が完全に埋められた後に置かれた。この石碑はトル期（紀元前500～200年：先古典期中～後期）に属し、素面の祭壇（2号記念物）が前に置かれていた。また、3号記念物を置く前には、4号記念物が破壊されて供物と共に埋納された。ケフ期（紀元後0～200年：先古典期後期）に、6, 7号記念物が、3号記念物より建物側に置かれていた。これらは素面の石碑と祭壇である。

3号記念物：J7-4B-3建造物正面より出土した。川原石の上におかれていた（図8）。建造物

に関連する出土土器より、ウク期（紀元前200～0年：先古典期後期）とされる。凹みは64×102cmである。暗灰色片岩（写真2.3）。

4号記念物：J7-4B-4建造物正面から破壊された状態で出土した。楕円形で方形の凹み（102×64×12(深)）を持っている。ウク期とされる。

(13) カミナルフユ遺跡

グアテマラ高地のグアテマラ盆地西側の緩やかに傾斜する部分に位置する。標高は約1500mである。200基を超えるマウンドが確認された。時期は先古典期前期から古典期後期までである。

5号祭壇：A-V-6建造物とA-V-8建造物の間より出土したとされる。カエルを形象した石彫で、上面に凹みが彫られている。凹みは86×107×43(深)cmである（写真1.2）。出土状況不明（Parsons, 1986）。

骸骨形香炉：G建造物の基部にあった。上面に凹みがみられた。大きさ等不明（Ivic de M., 2007）。出土状況不明。

(14) アマティトラン

アマティトラン湖の近くに位置する。標高は約1200mである。大きな丸い石に四足獣が彫られ、その背中部分がやや凹んでいる（写真4.2）。出土状況不明。

3. 凹みの特徴と石彫の主題

凹み部分の特徴をみると、浅い場合と高さの半分以上の深さを持つ場合がある。また凹み部分の全体に対する割合が大きいものから小さいものや底部が丸くなっているものと角を持ったものがある。

浅い凹み部分を持つ事例は、イグレスシア・ビエハ遺跡1, 2号記念物、イサバ遺跡17, 32, 55, 56号記念物13, 63号祭壇、タカリク・アバフ遺跡36/38号祭壇、エル・カスティヨ遺跡8号記念物、ビルバオ遺跡26, 28, 43, 76号記念物、サクレウ遺跡出土石彫1基、タフムルコ遺跡出土石彫2基、パチワック遺跡出土石彫、ロス・セリトス・チホフ遺跡出土石彫、カミナルフユ遺跡香炉石彫、アマティトラン遺跡出土石彫がある。タカリク・アバフ遺跡36/38号祭壇は、下部に4脚（円柱状）を持っている。また、イサバ遺跡32号石彫は凹みを中央に持つ円盤状石の下に円柱状の基部がついている。一方、イサバ遺跡13号祭壇とタフムルコG石彫は上面の凹み部分が長細く溝状となっている。溝はT字と十字状になっている。全体の石彫の大きさと比較すると小さい凹み部分を持つ石彫は、タフムルコ遺跡1号石彫とパチワック遺跡出土石彫がある。しかし、凹み部分以外の特徴は異なっている。高さの半分近くの深さを持つ石彫は、ケレ

バ遺跡1-3号祭壇が挙げられる。ケレバ遺跡2号祭壇は、大きな楕円形の石に広い方形の凹みがある。この2号祭壇に、やや深い凹み部分の形状が似ているのはエル・ポルトン遺跡3, 4号記念物がある。楕円形で平らであることを考慮すると、イサバ遺跡17号記念物は上記の円盤状石彫と同じである。また、ラス・アニマス遺跡出土石彫はこの形の凹みに似ている。この形状の凹みは用途が不明であるが、ケレバ遺跡1号祭壇の広く浅い凹みの横には外に続く溝があり、水を流すためとされている。これが正しいとすると、水を貯める用途が考えられる。凹みから溝が切られている石彫は、イサバ遺跡56号記念物にもあり、やはり水を流すためとされる。上記の石彫以外をみると、イグレスシア・ビエハ遺跡1・2号記念物、イサバ遺跡63号祭壇、ロス・セリトス・チホフ遺跡出土石彫、アマティラン出土石彫は、同じ特徴を持っていない。

高さの半分以上の深さがある凹みを持つ石彫は、イサバ遺跡24, 37号記念物、タカリク・アバフ遺跡2号祭壇、ビルバオ遺跡72, 73号記念物、エル・ポルトン遺跡3, 4号記念物、カミナルフユ遺跡5号祭壇が挙げられる。この中で、鉢形石彫はビルバオ遺跡72, 73号記念物、エル・バウル遺跡29号記念物、パンタレオン遺跡11号記念物である。イサバ遺跡37号記念物は破片であるが、深い凹みを持っている。

石彫に表現される主題をみる。タフムルコ遺跡出土石彫2基は、人物や動物などが石彫の側面に浮彫りされている。ビルバオ遺跡25, 26, 28, 76号記念物、パンタレオン遺跡11号記念物は、側面に人物若しくは骸骨の顔が表現してある。カミナルフユ遺跡出土香炉は髑髏が彫られている。エル・バウル遺跡29号記念物、ビルバオ遺跡72, 73号記念物は、水平方向に枠で囲まれた帯状部分があり、そこに様々な文様が彫られている。イサバ遺跡24号記念物は、籠を象したような石彫で、底部は方形に穴が開けられている。タカリク・アバフ遺跡2号祭壇、カミナルフユ5号祭壇、アマティラン出土石彫は動物を象した石彫で、その背中部分が開けられている。パチワック遺跡出土石彫は、動物の背中部分に小さい凹み部分がある。アマティラン遺跡出土石彫は、動物の背中部分に広く浅い凹み部分がつくられている。また、コヨル遺跡出土石彫、ケレバ遺跡1号記念物は、ジャガーとされる動物が側面に浮き彫りされている。エル・カステイヨ遺跡8号記念物には側面に階段状の渦巻が浮彫りされている。タカリク・アバフ遺跡36/38号祭壇は、上面の凹みの周りにヘビが浮彫りされている。石彫に表現される主題と凹みの形状は、あまり関係が無いようである。

4. 出土状況からみた凹み部分

殆どの石彫が出土状況不明である。ここでは出土状況が分かっている石彫についてまとめる。

多くは、建造物の近くから出土している。建造物の基線上から出土しているのは、イグレスシア・ビエハ遺跡1号記念物、エル・ポルトン遺跡3号記念物、ビルバオ遺跡40号記念物であ

る。また、ケレパ遺跡2号祭壇は建造物の頂部から、ロス・セリトス・チホフ遺跡出土石彫は球戯場の真ん中から出土しており、基線上と考えることもできる。タカリフ・アバフ遺跡36/38号祭壇は、水路の一部となっている。一方、広場から出土しているのは、ビルバオ遺跡25, 26, 43, 76号記念物、タフムルコ遺跡1号石彫である。建造物の近くから出土しているのは、イグレスシア・ビエハ遺跡2号記念物、イサパ遺跡17, 24, 32号記念物、同遺跡13, 63号祭壇、エル・カステイヨ遺跡8号記念物、ケレパ遺跡1, 3号祭壇、カミナルフユ遺跡5号祭壇・髑髏形香炉石彫である。このうちで、イサパ遺跡17号記念物は他とは異なり凹み部分の端から球形石が出土している。球形石を使った何らかの儀礼と関連する可能性がある。ビルバオ遺跡43号記念物は、円盤状で凹んだ部分の中央が焼けており、炭化物も出土した。タカリフ・アバフ遺跡36/38号祭壇の凹み底部にも炭化物が付着していた。このことを考慮すると、香炉としての用途が考えられる。また、イサパ遺跡37号記念物は建造物直近の集石部分から出土している。以上の石彫は建造物の機能と関連して、なんらかの儀礼に関係していた可能性がある。

墓と関連して出土しているのは、サクレウ遺跡出土石彫である。葬送儀礼と関係している可能性が高い。また、川の近くから出土しているのは、イサパ遺跡56号記念物のみである。

時期別にまとめると、最も早いのが先古典期後期のイサパ遺跡55, 56号記念物、13号祭壇、エル・ポルトン遺跡3, 4号記念物である。イサパ遺跡では、水との関連が考えられる。古典期には、ビルバオ遺跡25, 26, 28, 43, 72, 73, 76号記念物、カミナルフユ遺跡出土香炉がある。このうちでは、ビルバオ遺跡では浅い凹みを持つ43号記念物は香炉としての用途が考えられる。後古典期は、サクレウ、タフムルコ、ロス・セリトス・チホフ各遺跡出土石彫がある。サクレウ遺跡出土石彫は葬送儀礼との関係が考えられる。一方、タカリフ・アバフ遺跡36/38号祭壇は、出土状況では古典期後期である。しかし、他の石彫破片と同様に水路に再利用されたとされる。時期は古典期後期以前と考えられ、香炉の可能性はある。

5. 凹みの機能について

石彫上面の凹みの用途については、遺跡ごとに出土例に関連して記述があるのみである。以下に、先行研究をまとめるとともに、上記の分析では対象としなかった上面に凹みのある小型石彫からも上面の凹みの機能について検討を加え、凹みの機能を考える。

シャラーとセダはエル・ポルトン遺跡出土例を他のメソアメリカの遺跡と比較している。カミナルフユ、イサパ、タカリク・アバフ遺跡に浅い凹みを持つ石彫があり、ケレパにもみられるとしている。また、サン・ロレンソ遺跡では、8号記念物や21号記念物に浅い凹みがある。21号記念物はサン・ロレンソA期(紀元前1150~1050年)とされる。こうした石彫は、ベラクルス-タバスコ州に類例があるとし、ラ・ラグニタ遺跡の例を含めて石棺の可能性を指摘している。マヤ低地のアルタル・デ・サクリフィシオス遺跡ではサリナス期(紀元後150~450

年：先古典期後期～古典期前期）に属する香炉－祭壇（写真5.1）も示している（Sharer & Sedat, 1987）。イサパ遺跡の報告では、導水に関係するとされる。55, 56号記念物と同様に、球戯場東端にドーナツ状石（33号記念物）に彫られた溝も水を流すためとされる。また、凹みを持つ小型石彫も儀礼的沐浴と関連する可能性を指摘している（Lowe, et al., 1982）。イサパ遺跡13号祭壇の上面に彫られたT字文はマヤ文字のイクにも通じており、水に関係が深いとされる（Norman, 1976：48）。ピルバオ遺跡では、凹みは献酒、焼香、供犠のためであろうとされる。また、半球形の鉢状石彫は、ベラクルス出土の石彫にみられる主題と比較してテオティワカン起源の可能性を示している（Parsons, 1969）。先行研究では、凹みの機能は導水、香炉、石棺、祭壇、献酒、供犠という可能性が示されている。

以下では、記念物石彫よりも小さい小型石彫を説明し、その機能を探る。

サクレウ遺跡1-1墓より出土した人物形象小型石彫は香炉とされる（図5、Woodbury, 1953, fig. 278.a）。チャルチュアパ遺跡では、四つん這いになった人物が形象されその背中部分が削りぬかれている箱形石彫が香炉と報告されている。タスマル地区14号墓の座葬の人物の前より出土している（写真5.5）。また、上面に凹み部分を持つ円筒形石彫であるピルバオ40号記念物は、サンタ・ルシア期の層より出土したが、ラグネタ期のC-2建造物の基線上に位置している。ネバフヤフィンカ・ボリビア遺跡などでは三脚付鉢形小型石彫が出土している（写真5.2, 3）。

以上のように、小型石彫も香炉と報告される事例が最も多い。

先行研究や小型石彫の凹み部分と凹み部分を持つ記念物の出土事例を含めて考えると、最も可能性があるのは香炉としての機能である。しかし、イサパ遺跡では、凹みの横に切られた溝と近くにある湧水点から導水に関するものとされる。また、ケレパ遺跡1号祭壇は水を流すように溝が切られており、水に関連する可能性も考えられる。エル・ポルトン遺跡3、4号記念物も、溝は無いがケレパ遺跡と同様な広い凹みを持っている。このように考えると、石彫上部にみられる凹み部分は、焼香若しくは水に関連する可能性が高いと考えられる。タカリフ・アバフ遺跡36/38号祭壇は、水とも焼香とも関連することが考えられる。一方、水に関連する儀礼に香を焚くために使われたことも考えられる。

6. おわりに

メソアメリカ南東部太平洋側でみられる上面に凹みがある石彫は、先古典期後期が最初である。これより前にこの種の石彫がみられるのは、メキシコ湾岸のオルメカ文化においてである。

上面に凹みがあるものをオルメカ文化でみると、サン・ロレンソ8, 21号記念物がある。このうち、8号記念物は上面というよりは側面に凹みがあると考えられることも可能である。しかし、立っている状態で出土した21号記念物は、直方体の上面に凹みがあり、下面にジャガー

の浮き彫りがある。また、オルメカ文化においては、水を貯めるための石製容器がある。サン・ロレンソ遺跡では、9号記念物は動物を形象した石彫の内側がくりぬかれて、水を受けるための容器となっている。また、水路の一部となっている52号記念物は背中部分がくりぬかれたジャガー人間を形象している。一方、オルメカ文化において、上面に凹みがある物体が観察できる石彫をみると、ラ・ベンタ遺跡5, 70号記念物がある。太っちょの人物が、両手で箱状の物体を抱え捧げているような姿勢をしている。その箱には上面に凹みがある(写真6.1, 2)。一方、メソアメリカ南東部太平洋側では、太っちょの石彫が多くみられる。凹みのある石彫が出土しているイサパ遺跡でも、太っちょの石彫が出土している(Lowe, et al., 1982)。

以上のことを考えると、テワンテペック地峡を越えることにより、太っちょの石像と凹みをもつ直方体部分が分離したとも考えられる。先古典期中期では、ラ・ベンタ遺跡5, 70号記念物のような石彫がメソアメリカ南東部太平洋側ではみられず、代わりに太っちょの石像が手には何も持っていない姿で表現されている。また、ラ・ベンタ遺跡70号記念物の顔は4方向に各1面彫られており、4面の顔を持つ太っちょ石彫となっている。この4面の顔を持つ石彫の類例をメソアメリカ南東部太平洋側に求めると、カミナルフユ遺跡の石彫2基に4面の顔が表現されている。しかし、この場合には頭部のみが表現され、胴部は無い。

本来、上面に凹みのある直方体状の物体は、メキシコ湾岸では太っちょの人物(若しくは神様)が捧げ持つものであるといえる。また、メソアメリカ南東部太平洋側では遺跡の重要な位置に置かれることも考えると、儀礼を行った場若しくは祭壇であったことが考えられる。一方、選ばれた主題に雨若しくは水と関係が深いジャガー、カエルがあることを考慮すると、水との関連がある可能性がある。こうしたことを考えると、水に関連した儀礼に使われた可能性がある。そして、太っちょ石彫との関係も考慮すると、豊穡儀礼との結びつきも考えられる。しかし、この仮説を検証するには現時点では資料が少ないため、今後の研究調査が期待される。

参考文献

- Andrews, E. W., V
 1976 *The Archaeology of Quelepa, El Salvador*. Publication 42, Middle American Research Institute, the Tulane University of Louisiana, New Orleans.
 Dutton, B. and H. R. Hobbs
 1943 *Excavations at Tajumulco, Guatemala*. Monographs of the School of American Research 9, Santa Fe.
 Ferdon, E. N. Jr.
 1953 *Tonala, Mexico: An Archaeological Survey*. Monographs of American Research 16, Santa Fe.
 Graham, J. A.
 1972 *The Hieroglyphic Inscriptions and Monumental Art of Altar de Sacrificios*. Papers of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology 64(2), Harvard University, Cambridge.

- Ichon, A.
 1977 *Les Sculptures de La Lagunita, El Quiché, Guatemala*. Centre National de la Recherche Scientifique, Paris.
 1992 *Los Cerritos-Chijoj: La Transición Epiclásica en las Tierras Altas de Guatemala*. Centro de Estudios Mexicanos y Centroamericanos, México, D.F.
 Ivic de M., M. y C. Alvarado G.
 2004 *Informe de Excavaciones Realizadas en el Parque Kaminaljuyú, Guatemala de Julio 2003 a Febrero 2004*. Centro Editorial Vile, Guatemala.
 Kaneko, A.
 2006 “Iglesia Vieja.” En *Presencia Zoque*, editado por D. Aramoni, T. A. Lee W. y M. Lisbona G., pp. 345–366.
 金子明
 2007 「メソアメリカ南部の太平洋岸トナラ地域の考古学調査」『メソアメリカに於ける古代都市の発展に関する研究』平成16年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究(B)）研究成果報告書, pp. 113–129.
 López Vasallo, R.
 2007 *Arqueología Tonalteca*. Consejo Estatal para las Culturas y Artes de Chiapas, Tuxtla Gutiérrez.
 Lothrop, S. K.
 1933 *Atitlan*. Publication 444, Carnegie Institution of Washington, Washington, D.C.
 Norman, V. G.
 1973 *Izapa Sculpture 1: Album*. *Papers of the New World Archaeological Foundation* 30, Provo.
 Parsons, L. A.
 1967 *Bilbao, Guatemala 1. Publications in Anthropology* 11, Milwaukee Public Museum, Milwaukee.
 1969 *Bilbao, Guatemala 2. Publications in Anthropology* 12, Milwaukee Public Museum, Milwaukee.
 1986 *The Origins of Maya Art: Monumental Stone Sculpture of Kaminaljuyu, Guatemala, and the Southern Pacific Coast. Studies in Pre-Columbian Art & Archaeology* 28, Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.
 Sharer, R. J. and D. W. Sedat
 1987 *Archaeological Investigations in the Northern Maya Highlands, Guatemala. University Museum Monograph* 59, the University Museum, University of Pennsylvania, Philadelphia.
 Schieber de L., C. y M. Orrego C.
 2001 *Los Senderos Milenarios de Abaj Takalik: Guía del Parque*. Ministerio de Cultura y Deportes, Guatemala.
 2010 “Preclassic Olmec and Maya Monuments and Architecture at Takalik Abaj.” In *The Place of Stone Monuments: Context, Use, and Meaning in Mesoamerica's Preclassic Transition*, edited by J. Guernsey, J. E. Clark, and B. Arroyo, pp. 177–205.
 Smith, A. L.
 1972 *Excavations at Altar de Sacrificios, Architecture, Settlement, Burials, and Caches. Papers of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology* 62(2), Harvard University, Cambridge.
 Tejeda, A.
 1947 “Drawings of Tajumulco Sculptures.” *Notes on Middle American Archaeology and Ethnology* 77, Division of Historical Research, Carnegie Institution of Washington, Washington, D.C.
 Thompson, J. E.
 1948 *An Archaeological Reconnaissance in the Cotzumalhupa Region, Escuintla, Guatemala. Contributions to American Anthropology and History* 44, Carnegie Institution of Washington, Washington D.C.
 Woodbury, R. B. and Aubrey S.
 1953 *The Ruins of Zaculeu, Guatemala*. Richmond, VA.

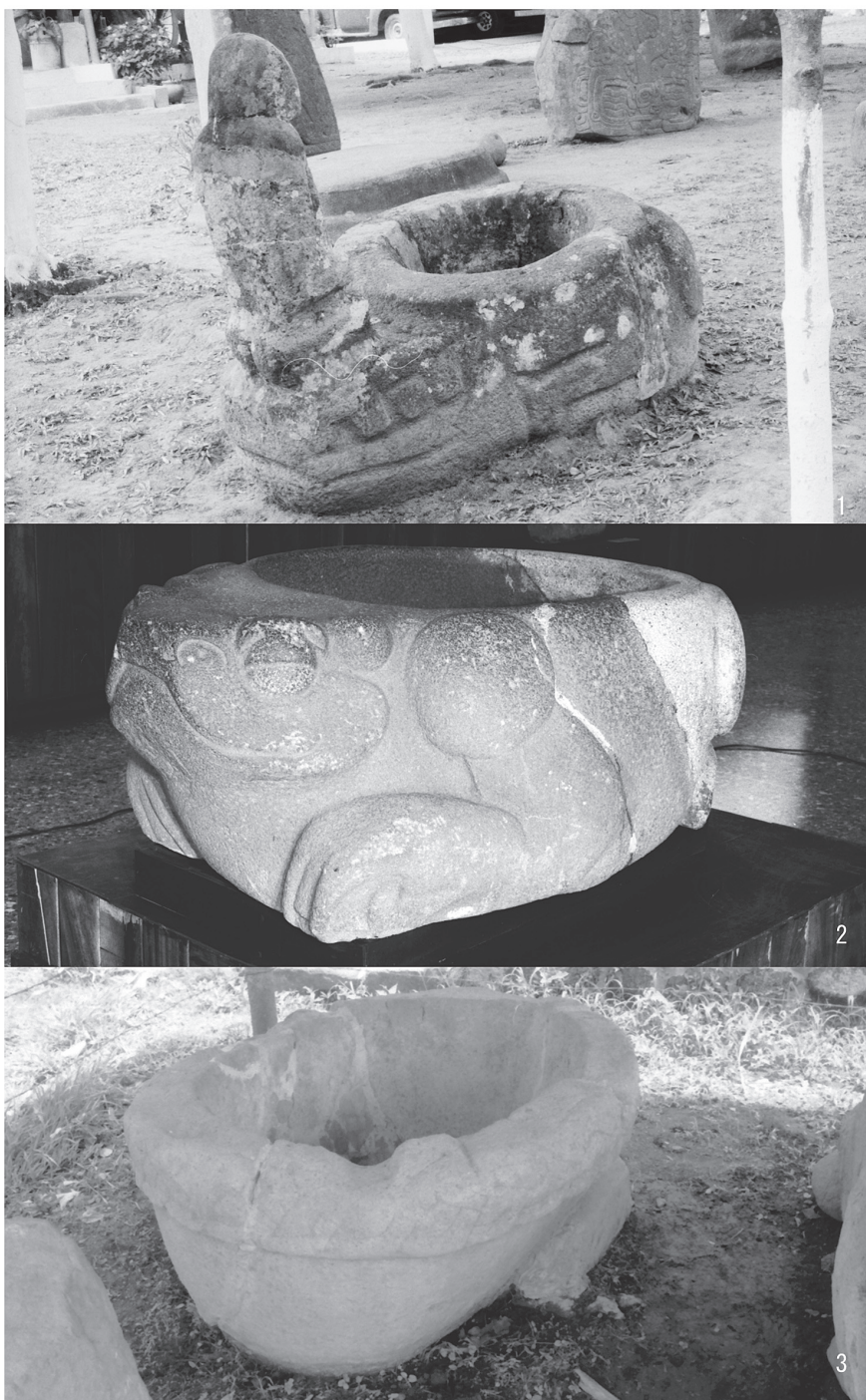


写真1 深い凹み部分を持つ石彫

1. タカリク・アバフ遺跡2号祭壇、2. カミナルフユ5号祭壇、3. イサバ遺跡24号記念物



写真2 広い凹み部分を持つ石彫

1. ケレバ遺跡1号祭壇、2. 同遺跡2号祭壇、3. エル・ポルトン遺跡3号記念物



写真3 コツマルワバ遺跡群出土石彫

1. ビルバオ遺跡28号記念物、2. パンタレオン11号記念物

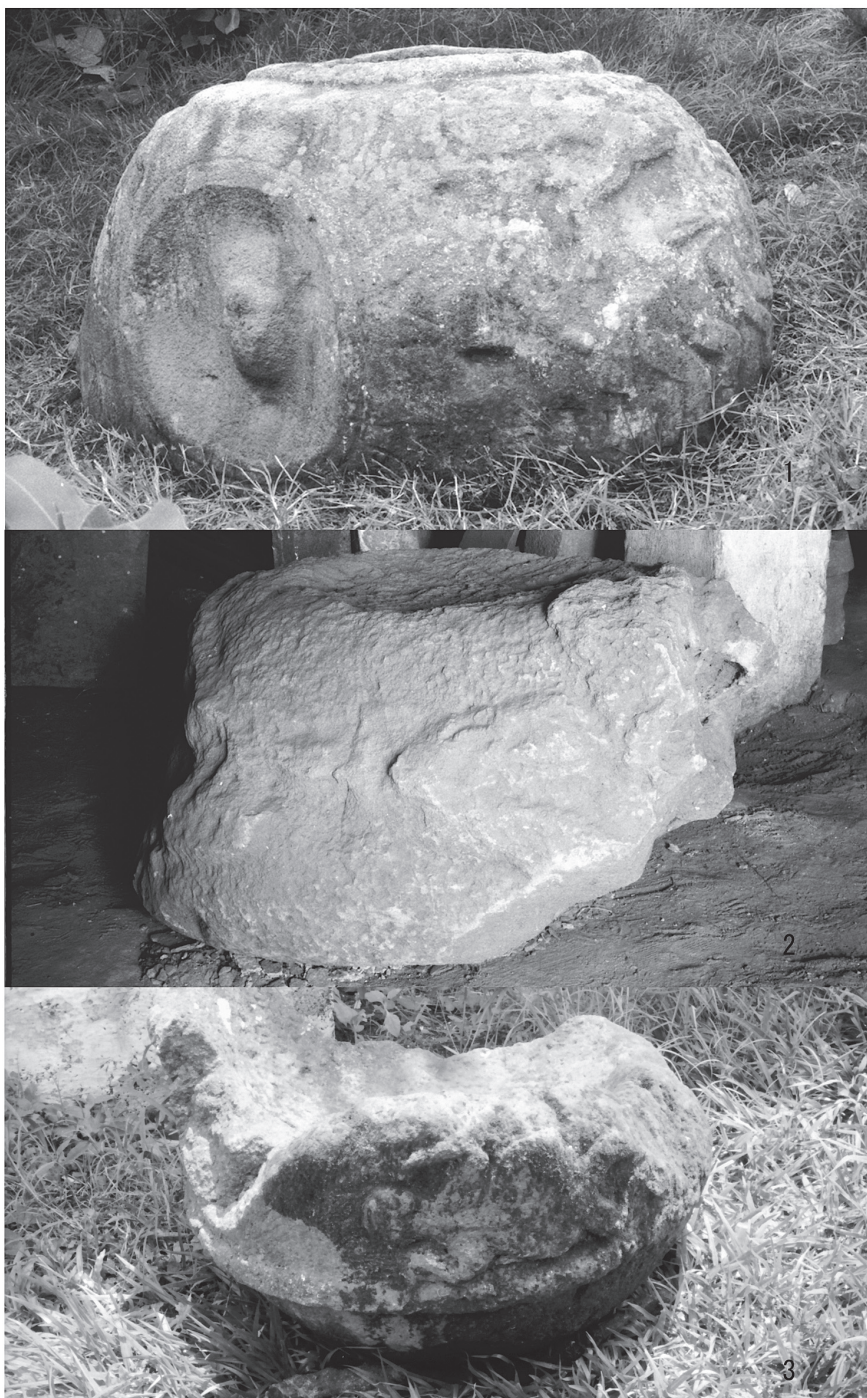


写真4 様々な凹みを持つ石彫

1. タフムルコ遺跡1号石彫、2. アマティトラン出土石彫、3. エル・パウル遺跡出土石彫



写真5 マヤ低地出土石彫とメソアメリカ南東部太平洋側出土小型石彫

1. アルタル・デ・サクリフィシオス遺跡出土香炉-祭壇、2. フィンカ・ボリビア遺跡出土石彫、
3. ネバフ遺跡出土石彫、4. アマティトラン出土石彫、5. チャルチュアパ遺跡出土石彫



写真6 ラ・ベント遺跡出土の直方体状の物を持つ太っちょ石彫

1. 5号記念物、2. 70号記念物

Abstract

Las cavidades superiores de las esculturas de la Costa Sur de Mesoamérica

Nobuyuki ITO

Distribuidas en la Costa Sur de Mesoamérica se localizan varias esculturas prehispánicas de piedra que mantienen una cavidad recurrente en su parte superior, motivo por el cual estos elementos escultóricos se han interpretado funcionalmente como incensarios, pilas, altares, tinas, cuencos y otros. Las formas y tamaños de las cavidades son variables. Dentro del sitio arqueológico, la distribución espacial donde se ubican unas esculturas mantienen un eje arquitectónico.

Por otra parte, en el sitio arqueológico de La Venta, se encontraron dos esculturas de personajes obesos sosteniendo una caja con sus dos manos frente al pecho, dicha caja presenta una oquedad en su parte superior que posiblemente cumplía la misma función.

Comparativamente, en la región del Golfo de México se combinan dos elementos; la representación de un personaje obeso sosteniendo una caja con una oquedad superior. En la región de la Costa Sur de Mesoamérica tan sólo se representa al personaje barrigón u obeso pero sin nada en las manos.

Considerando la cronología de los sitios arqueológicos, resulta plausible que los grupos humanos de la Costa Sur del Pacífico hayan adoptado el concepto de la escultura obesa de La Venta pero separando el elemento vinculado a la caja con cavidad superior.